

連続学習会第1回「共に模索する関係」開催報告

2024年10月

明治学院大学社会学部附属研究所 相談・研究部門

昨年度に引き続き「ひきこもりなど生きづらさのある当事者とともに支援や社会のありかたを考える連続学習会」を開催しました。概要は以下の通りです。

◇開催概要

日時：2024年10月25日（金）15～17時

場所：明治学院大学社会学部附属研究所多目的ルーム

内容：アイスブレイク

話題提供 中島浩籌さん（河合塾 COSMO 講師など）

トークセッション 中島浩籌さん × 喜久井伸哉さん（詩人、フリーライター）

グループでの対話

全体での対話



話題提供



トークセッション

参加者の呼ばれた名前と好きな飲み物を共有した後、中島浩籌さんは、「自身の経験と『不登校』対策～原因の『分からなさ』と『仕分け』」と題し、ご自身が高校の教師を辞めた原因の「分からなさ」についてお話されました。そうした「分からなさ」は「不登校」経験者からも聞くことが多いそうです。学校に通う生徒は登校する理由がわからなくても問題にはなりません。一方で、「不登校」生はその理由がわからないと問題化されてしまいます。それは「不登校」を「問題な行動・状態」と捉える周囲のまなざしがあるからだ指摘されました。重要なのは、支援者が「不登校」の原因・理由を細かく探り、「仕分け」していき、一丸となって対応していくことではなく、多様な出会いに開かれた多様な居場所・関係がつくられていくことではないかと問題提起されました。

続いて喜久井伸哉さんは、「不登校」や「ひきこもり」の原因は答えがたく、喩えるならば吃音のように自分の意思とは関係なく、学校に行きたいと思っても身体が動かない経験だったそうです。中島さんの「分からなさ」のお話を受けて、分かりやすさという光が求められる社会のなかで、「分からなさ」という闇が削られてしまったとお話されました。そうした「分からなさ」が確保されない社会においては、いわば森のような、自由が担保されている場所が必要であると主張されました。

お二人の話を受けて、3名ずつのグループで感想を話し合っていました。その後の全体での対話では、『なぜ』という問いを相手に向ける前に、そういうこともあるよねと踏みとどまることが私たちのあいだで共有されるとよいのではないかとのご発言がありました。

研修後のアンケートには、『わかるで止まらない』支援者として気を付けたい』という支援者としての姿勢を表明する感想や、『共に模索する関係』をもっと掘り下げていきたい』といったご感想をいただきました。ソーシャルワーカーとして、生きづらさのある当事者と出会い、当事者の語りを聞くという、これまで前提としてきたこと自体がどのような行為であるのかを問われたような気がします。第2回も引き続きどうぞよろしくお願ひします（ソーシャルワーカー 竹沢昌子、森香苗）。